

# 地域における場からのつながりの再生

—「〈縁起〉の間」を手掛かりに—

森屋 雅幸

MORIYA Masayuki

## 1. はじめに

我が国では 1950 年代から 70 年代の高度経済成長を経て、数十年が経過した。この時期の急速な近代化は日本国内に様々な影響を与えた。そのひとつが都市と地方の二極化という現象である。経済・産業の都市への集中は労働人口の集中を招き、都市は過密、地方は過疎という現象を引き起こし、地方の地域共同体は少なからず解体した。都市への流出人口は、共同体から切り離された個となり、地方における解体された地域共同体はいびつで断片的にその姿を地域<sup>(1)</sup>に残したと言える。それに伴い、従来の人間同士のつながりも変容を強いられたと言える。こうした個人化は抑圧構造を持つ地域共同体からの個の解放という社会的要請が背景にあるものの、都市に限らず地方においても「ハダカの孤人」(神島 1990: 86)を生み出す契機となった。同時に、都市への移住は、先祖から代々受け継がれた歴史や地域を取り囲む自然との別離を意味した。また、高度経済成長における産業構造の変化は第 1 次産業を衰退させ、地域の伝統や自然と関与する生業を喪失させた。つまり地域を出た人間、残った人間、両者にとって自身を囲む地域との関係もまた変容したと言える。この変容はいわば人間と地域のかげがえのなさの喪失を招いたと言える。

内閣府の意識調査から高度経済成長を期に国民の意識は「物の豊かさ」から「心の豊かさ」の志向へ傾倒したが(共生社会形成促進のための政策研究会 2005: 16)、この意識の変化は、二極化が招いたつながりの喪失とは無縁でないと考える。こうした事態は人間の心性を疲弊させたと言える。地方は心性の疲弊に限らず、都市と比べれば経済面においても疲弊し、二重の疲弊を抱える。自治体もこうした現状から地方各地で疲弊した地域の活性、再生策が取り組まれている。

そこで、本論においては二重に疲弊する地方に焦点をあて、地域再生のあり方を探ろうと考える。ただ、本論で言う地域再生とは経済・産業の活性化における地域再生でなく、前述した人間同士のつながり、さらに自身を取り巻く他者・自然をはじめとする地域とのつながりの再生から地域再生を目指すものとする。

## 2. 地域再生への手がかかり

### (1) 地域再生のシナリオ

まず本論の目的とする地域再生に近似する論考を探る。神野直彦は地域再生をすぐさま経済活性と位置付けず、地域社会を人間が生活する「場」として取り戻すというシナリオを示し、人間と自然が共生する世界の創造の為、人間の存在欲求の充溢の必要性を論じる（神野 2002：167-8、184）。この欲求は人間の他者や自然との調和の欲求で、これに対する所有欲求を人間の外側に存在する事物の所有の欲求と説明する（神野 2002：36）。小林康夫が人間が所有の自由により「存在はますます、耐エガタイホド軽くなり、〈在る〉はますます〈持つ〉ことによって浸食されている」（小林 1994：254）と表現するよう、所有欲求を持つ個人はその存在が希薄な様態と言える。神野の地域再生のシナリオは人間同士、地域と人間の関係性の回復の必要性が導かれ、地域とつながるコミュニティ<sup>(2)</sup>再生の構想が析出される。この構想は本論の目指す地域再生にオーバーラップする。では、これはかつての抑圧構造を持つ地域共同体の再生を意味するのか。

国は高度経済成長以降の地域共同体の解体の動態をただ静観していた訳でなく、昭和44年（1969）に国民生活審議会報告「コミュニティ—生活の場における人間性の回復—」を受け、自治省によりコミュニティ施設設置、地域住民の組織化という形で政策化された（横道 2009：3）。ここで定義されたコミュニティは「従来の古い地域共同体とは異なり、住民の自主性と責任制にもとづいて、多様化する各種の住民要求と創意を実現する集団」（国民生活審議会調査部会 1969：2）と明確に地域共同体とは異なる存在として述べられる。鳥越皓之はロバート・マッキーバーのコミュニティの定義からすると国民生活審議会報告に定義されるコミュニティは本来であれば「アソシエーション」という表現が適当であり、あえて「コミュニティ」という表現を選択するのは、コミュニティに機能性を超えて、地域社会全体の幸福等の情緒性を求めていると捉える（鳥越 1997：109）。現在に求められるコミュニティは伝統的共同体と異なる、コミュニティともアソシエーションとも表現し難い曖昧な像が浮上する。では新しいコミュニティのモデルを何に求め、いかに再生するのか。

### (2) 求められるコミュニティとは

広井良典は日本で「コミュニティ」と言うと自治会や町内会とイメージする人が大多数であるとする（広井 2009：72）。自治会や町内会は江戸時代の五人組がルーツとし、さらに遡れば古代の五保の制まで行き着く（倉田 2000：66）。町内会は太平洋戦争中に軍部の末端機関として編成され、戦後GHQに解体された後に国により再編成された（横道 2009：1-2）。こうした経緯を概観すると、多くの人々が抱く日本のコミュニティとは、いわば権力側が敷いた制度に裏打ちされた集団がイメージの源泉と言える。内山はこうした伝統的な地域共同体に人々が抱く閉鎖性や排他性あるいは、くびきという暗澹なイメージは、すでに壊れた共同体に抱くものであり、本来の「伝統的な共同体」の姿は別にあると言う（内山 2010：150）。また、この真像に迫るには共同

体の基層にある精神を歴史的な文脈で探る必要があるとする（内山 2010：32）。つまり、壊れたコミュニティから捨象された精神を見出すことは、現代に求められるコミュニティを思考するひとつの手掛かりになり得る。

ただ、コミュニティに対する批判的意見も多数の論者から出されており、コミュニティを地域再生の万能薬として無批判に受け入れるのは早計である。眞鍋貞樹によればその批判は同一性幻想、仲間内の内包と排除などが挙げられると言う（眞鍋 2011：74-95）。眞鍋はコミュニティが善と悪両側面を持つのは事実とした上で、コミュニティを悪しきものでなく、善きものとして再生する営為が重要と論じる（眞鍋 2011：195）。同様に中村雄二郎はコミュニティの二面性について触れ、「個を共同体に埋没させるのではなく、共同体を個が十分に開花するための土壌をどのようにすべきかは、人類にとって大きな共通の課題である」と述べる（中村 1997：66-7）。眞鍋の言う善きコミュニティとは、中村が言う個を埋没させず、個を生かすコミュニティと捉えることもできる。はたしてこの善きコミュニティを再生することは可能であろうか。

### 3. コミュニティの基層の精神

#### (1) 二元論を越えたコミュニティ

ジャン・リュック・ナンシーは批判と肯定の狭間で行き来する「共同体」とは別の「社会的絆」があったと指摘する（ナンシー 2002：22）。同時に「『個々の特異存在』のコミュニケーション」（ナンシー 2002：203）と表現するよう、同一性幻想や内包の論理による「同化」という共同体の負の側面とは異なる側面がナンシーの共同体論にはみえる。小田亮はこの共同体を「非同一性による共同性」（大杉 2001：292）と表現されるとする（小田 2010：19）。この「非同一性による共同性」は「伝統的な共同体」の基層の精神に現れるものなのか。コミュニティの基層の精神を探るため、その語源を紐解く。共同体（コミュニティ）の語源はラテン語の *communitas*（コムニタスの表記もあるが、本論ではコムニタスで統一する）に由来する（廣松他 1998：346-7）。ナンシーの共同体論を引き継ぐロベルト・エスポジトはラテン語の *communitas* に触れて、これまでの共同体は帰属や共有、同一性や類似性という観点で捉えられてきたが、語源を紐解いていくと、むしろその逆であると主張する（エスポジト 2009：34-5）。岡田温司はエスポジトの「コムニタス」は政治思想の個人主義、共同体主義でもないオルタナティブな存在と指摘する（岡田 2008：51）。つまり、「伝統的な共同体」の基層の精神には「コムニタス」が内在すると言える。

ヴィクター・ターナーは「コムニタス」を人類学の領域で捉えたが、「非同一性による共同性」という性質はターナーの「コムニタス」においても語られ、「コムニタス」を封建的構造と対になる存在として捉える（ターナー 1996：74、128；ターナー 1981：218）。「コムニタス」は個人間の平等で水平的な関係性を成り立たせ、封建的構造と鏡映しの性質を持つコミュニティと言える。

## (2) 「コムニタス」と「無縁」

ターナーの「コムニタス」は人類広範にわたる概念であるが、これを日本の文脈で捉えると、どうであろうか。日本において「コムニタス」に比類した概念に、網野善彦が論じた「無縁」がある。「無縁」とは「主従関係、親族関係等々の世俗との縁が切れている場や人（集団）」（網野 1996：120）と定義され、場の性格により「公界」、「楽」とも表現したと言う（網野 1996：110）。両者の類似性については網野自身や阿部謹也、赤坂憲雄が論じる（網野 1996：251；網野他 1994：250；赤坂 1992：49-50）。赤坂が両者の位相が異なると論じるように、「無縁」と「コムニタス」はすぐさま同一の存在と位置付けるのは早計と言えるが、両者はナンシーが言う「人類がわれわれの知っているものとは全く別の社会的絆」（ナンシー 2001：22）の一樣態と捉えられよう。

人（集団）・場を「無縁」たらしめる原理に「無縁」の原理がある（網野 1996：135）。「無縁」の原理を整理すると、場や人（集団）が聖なるもの呪術的なものとの結び付きにより威光を放ち忌避の対象となる原理、権力側（「有縁」）への抵抗、批判の原理という二種の内容が読み解ける（網野 1996：38-9、135）。「無縁」の社会構造概念上の位置は境界に存在し、前者は神仏の世界との境界であり、後者は有縁との境界と言える（赤坂 1992：54）。「無縁」とは二重の意味における境界上に成立したと考えられ、「聖性」と不可分に関係すると言える。網野は「無縁」の場の特徴を「無主」「無所有」と表現し、その性質として「自由と創造の場所」、「無政府世界」等を挙げる（網野 1993：313、344）。また、中世に登場した「無縁」は徐々に「有縁」にその原理を取り込まれ微弱になっていくが、「無縁」は現代においても息衝いていると網野は論じる（網野 1996：250-1）。

以上、「無縁」の内実を読み解くと、日本における伝統的共同体の精神の基層にある「無縁」は「聖性」を媒介とした場と人（集団）の関係においてコミュニティを成り立たせるものと言える。つまり、「無縁」の精神からコミュニティ再生を考えるならば、それは必然的に人間同士、地域をむすぶ地域再生を成し得ると考えられる。ここからは、コミュニティ再生を具体化するため、過去の自治省によるコミュニティ政策の課題を振り返る。

## 4. 「コミュニティの中心」の変遷

### (1) コミュニティ政策の課題と「コミュニティの中心」

先に見た自治省によるコミュニティ政策は実際、住民の組織化というプロセスにおいて旧来の町内会等が大部分を占めていたのが現状で、新しいコミュニティの形成という当初の意図と異なる結果を導いていた（横道 2009：5；眞鍋 2011：112）。この政策は地域の特定の場からのコミュニティ創出を試みたと言えるが、なぜ政策は良好に結実しなかったのか。

広井は人々が気軽に集まり、様々なコミュニケーションや交流が生まれる、地域の拠点的な場所を「コミュニティの中心」と呼ぶ（広井 2009：67）。この場は黒川紀章がいう「中間領域」（黒川 1996：265、320）に近似した概念とする（広井 2009：70）。

「コミュニティの中心」は何らかの外部への窓で地域社会の内外の接点に位置し、伝統社会において「宗教・教育・経済」という要素が寺社に具備され、これら要素は市場化・産業化社会へ移行すると学校や商店街に分散すると言う（広井 2009：86-92）。「コミュニティの中心」は自然発生的であり、民衆から湧出した点で成立においてコミュニティ政策のコミュニティ施設とは相違が生じる。コミュニティ政策が地域に完全に浸透し得なかった要因をここに掴むことができよう。つまり「コミュニティの中心」のように民衆世界で自然に湧出した場を思考しない限り、コミュニティ再生ひいては地域再生は成し得ないと言える。

## (2) 「茶堂」・「惣堂」の系譜

「コミュニティの中心」に比類した「地域の居場所」という場を久田邦明が論じている。久田は中間集団<sup>(3)</sup>に類した中間団体を育む場を「地域の居場所」と呼び、この原型を中国・四国・九州地方に点在する「茶堂」という小堂にみる（久田 2010：244）。「茶堂」は往来する近隣住民や部外者が立ち寄り、地元の人が交代で茶を振る舞われたことが名の由来とされ、住民の集会所で祭祀の場で、境界性と公共性、二つの性質を併せ持つと言う（久田 2010：177、195-196、215）。両者を比較すると「地域の居場所」の原型である「茶堂」と「コミュニティの中心」には幾分か共通性がみられる。

日本には「茶堂」の他、名こそ異なれど類似した性質や役割を持つお堂が各地に点在し、その中には「惣堂」と呼称されるお堂も存在する。藤木久志は「惣堂」は中世村落のシンボルであり「無縁」の場であったと指摘する（藤木 1997：6；2010：96）。「惣堂」は中世後期の村落の自治的組織の拠所であり、この組織は「惣」と呼ばれ、長幼の序でなく水平的なネットワークを構築したと論じられる（黒田 2006：249；勝俣 1996：132）。お堂が「コミュニティの中心」であり、「非同一性による共同性」の核であったことが、少なからず読み取れる。そうであるならば、「茶堂」や「惣堂」は現代においても「無縁」の場といえるのだろうか。「惣堂」は室町時代以降から近代にかけて築造され、近代初期の廃仏毀釈によって大部分が廃絶される（森 2003：141-6）。「茶堂」も少なくとも江戸時代初頭には築造され、お堂は現存するが、茶の接待は戦時中に中止され戦後再開したが、現在は廃絶に近いようだ（久田 2010：188、215）。いずれも現存するが、地域内での従前の役割は喪失している。マックス・ウェーバーは社会が合理化され「魔法からの世界解放」（ウェーバー 1936：33）を経て、従前の価値観念が喪失すると論じたが、お堂の廃絶も近代化を経て付帯した「聖性」を喪失したと言える。こうした場は完全に地域から喪失したのか。

先に「惣堂」は村のシンボルであったと述べたが、杉浦直によればシンボルは時間的累積により場の「聖性」が喪失しても、場が永続した事実が「歴史的アイデンティティ」を喚起する「歴史的アイデンティティ・シンボル」として残ると言う（杉浦 1992：68）。歴史について中村は、それが生き方の鏡で自分自身であり、それを通し、自身を知ることができる」と述べており、アイデンティティを歴史性に見出すという点は見事に重なり合う（中村 1977：200、214）。シンボルを支えた「聖性」は近代を経る中で「歴史性」に変容した可能性がみられる。ここに現代の「無縁」の場の手掛りを読み解くことができる。

「歴史性」を媒介にしたつながりとは、いかなるものか。河本英夫は「物語とは、時間を組織化する隠喩であり、物語をつうじて時間の流れをひとまとまりの事態として経験しているのである。」と述べる（河本 1995：70）。これは裏を返せば、時間的累積としての歴史性は物語を編成すると言える。河合隼雄は仮説として物語が様々な意味で結ぶ力を持つと述べ、人間の根源に関わり、必要性を訴える（河合他 1995：119；河合 2003：19-20）。すなわち場の「歴史性」により編成された物語は地域と人間、あらゆるつながりを生起させるものと解せよう。こうした要素を基に以下で現代の「無縁」の場の考察を進める。

## 5. 「〈縁起〉の間」の実態について

### (1) 「〈縁起〉の間」— 現代の無縁の場 —

延藤安弘は兵庫県神戸市長田区に所在する託老所駒どりの家に触れ、この場を人と人があらゆる排他を越える限りない受容的な関係である「コミュニティ」と評する（延藤 2001：101）。この一文からこの場が現代の「無縁」の場である可能性が導かれる。

駒どりの家は昭和 60 年（1985）頃に地域の住民運動が契機となり、築 100 年以上の民家を拠点に、地域住民のボランティア団体により宅労所の運営がなされた。この場は民衆の発意から生まれ、一世紀以上の時間的累積により成り立ち、中間集団が結成されたと言える。この場は少なからず、本論が導いた「無縁」の場に類すると言える。延藤はこの場を「縁起の場所」とも表現し、この場があらゆる他者と世界とのつながりの生起に結節するものであることを表す（延藤 2001：100-1）。三枝充恵が「縁」と「起」とは互いに通じ合っており、何かの生起を問えば必ず縁を前提としたと論じることから、「縁」はそもそも運動ないし媒介の力動を内在すると言える（三枝 2000：51）。先に見た「地域の居場所」の「居場所」の語について萩原建次郎は『私』と他者・自然・事物との関係において生成し『私』において体感される」と論じる（萩原 2011：62）。これは「縁起」に近似し、「縁起の場所」とは「地域の居場所」・「コミュニティの中心」とほぼ同義でありながら、「縁」というつながりに寄り添う言葉と捉えられる。そもそも、「無縁」も一切平等に救う慈悲心を示す「無縁の慈」という仏教用語に出自があり、「縁」に内包される言葉である（網野 1996：121）。現代において「無縁」は孤独という負のイメージを髣髴させ、現代に用いるのは些か不適當と言え、現代の「無縁」の場は「縁起の場所」という表現が適當と言える。ただ「無縁」の場の「中間領域」や「境界領域」という場の特性を考え、この特性を一言で表す「間」を用いるのが適當であろう（黒川 1996：320）。ベルクが「間」は「自由地帯」で、縁を具象化すると、両者の相関性を論じることからも「〈縁起〉の間」と表現するのが適當と考える（ベルク 1992：83）。「〈縁起〉の間」はいかなる様態で地域に存在するのか。

馬場憲一は地域文化財を依りどころにした共同体が地域社会の核となり、地域で発生する諸問題の解決や地域づくりの上で大きな役割を果たすと論じる（馬場 1998：58）。この主張は「文化財」が地域の人々の結節の核となる「〈縁起〉の間」である可能性を示す。地域の「〈縁起〉の間」は「文化財」に実態の手掛りがあると言える。た

だ、駒どりの家が文化財未指定であるよう、文化財が直ちに「〈縁起〉の間」に結び付くとは言い難い。地域の「〈縁起〉の間」を探るには、指定される「文化財」とは別の捉え方をする必要がある。山下晋司は文化が資源化する最も基本的な場を「コミュニティ」とし、資源化された文化を「文化資源」と呼ぶ（山下 2007：52）。馬場のいう地域文化財とは「文化資源」と表現される事物に近似するものと言える。「〈縁起〉の間」は駒どりの家のような地域の歴史的建造物としての「文化資源」に内在する可能性が導かれる。

## (2) 事例からみる「〈縁起〉の間」の内実

本論では、地域の「〈縁起〉の間」の実態を探るべく尾県郷土資料館（山梨県都留市）、津金学校（山梨県北杜市）、文化のみち撞木館（愛知県名古屋市）という歴史的建造物を取り上げ、現地調査を実施、分析した。いずれの事例も歴史的建造物とそこで活動する中間集団がセットで確認される事例で、現状までの時系列を単純化したものが以下である。

- ①「文化資源」の所有観が曖昧であり、何らかの危機に瀕している段階。
- ② 地域住民が「文化資源」の保護や活用を目的にアプローチを行う段階。
- ③「文化資源」の保護や活用を通して集った地域住民から中間集団が発足する段階。
- ④ 中間集団の活動が「文化資源」の保護を越えて地域へ向けたものになる段階。
- ⑤「文化資源」を地元自治体が取得し、中間集団が運営を実施する段階。

①の「文化資源」の曖昧な所有観は兼松はるみが撞木館を「公」でも「私」でもない「市民の領有空間」（兼松 2007：23）と称するように、各事例の場は「無縁」と同様「中間領域」・「境界領域」の性質がみえ、誰もが場に関われる余地が表出したと言える。②へつながらる動機づけは森有正が言う、伝統を越えようとする「内面的促し」と考える（森 1970：92）。これは「文化資源」に内在する時間的累積としての伝統や「歴史的アイデンティティ・シンボル」に起因すると考える。③はバラバラの個から中間集団が発足する段階である。これは、岡田真美子が「無縁」のように縁が断ち切られた後、新たに結ばれる「結縁」から生まれる「仲間」ネットワーク（岡田 2008：138-9）と呼ぶものに重なる。④の段階は、中間集団活動の結実の段階で「文化資源」が危機を脱し、その保護から活用に目的の主眼が置かれ、この場が活動拠点となる。これは事例から中間集団を成す人々の知の結集が読み取れ、ここに延藤が言う専門知と生活知の結合による「創発」が引き起こり「利用する知」・「育む知」が生起することに起因すると言える（延藤 2009：23-4）。すなわち「〈縁起〉の間」の生起の段階と言える。活動の地域への拡大であるが、これは萩原が「居場所」の構造は経験の構造と不可分に結び付くとし、未来へ向けての経験が更なる経験を誘い込み、これが連鎖的に生じると論じることに重なる（萩原 2011：62-3）。場に集う個々の経験の連続的な生起によって、事例の中間集団はつねに新しい地平を切り開いたと言える。⑤の段階は、「無縁」に則して述べるなら、「有縁」との関わりがある程度、制度によって明示化された段階と捉えられ、赤坂の言う規範的な「無縁」（赤坂 1992：46）と言える。この段階は「〈縁起〉の間」が安定化する段階でもある。また、③、④の段階で地域へ向かった活動で新たな地域の「文化資源」に接触することで、再度①～⑤のサイクルを経ながら

中間集団は「〈縁起〉の間」とともに、地域に分散していく様子が各事例から窺える。

いずれの事例にも共通するのが「文化資源」にはじめに接触しその後の活動の陣頭指揮を執ったキーパーソン<sup>(4)</sup>と地域外のよそ者の存在である。鶴見和子は市井三郎の「キー・パーソン」を内発的発展の担い手として「小さき地域の民」(鶴見 1996 : 30、214)と表現し、「内発的発展の運動の主体は、地域の定住者および一時漂泊者であるが、外来の漂泊者との交流と協働なしには、伝統の再創造または創造は触発されない。」(鶴見 1989 : 256)と論じることは、事例に共通する両要素と重なり合う。この論に照らすならば、「〈縁起〉の間」は、地域を内発的発展へ導く要素を育む可能性を内在していると考えられる。

## 6. おわりに

個々の「内面的促し」から始まる「〈縁起〉の間」の人為的な創出は不可能であろう。「〈縁起〉の間」の生起には「内面的促し」に通ずる経験の契機のデザインが求められる。これは「文化資源」を地域住民、自らの手で探し編成するデザインと言える。この発想を具体化したものに「フィールドワークショップ」があり、延藤はこれを「『始まりにおける能力としての活動』を創発する方法」とする(延藤 2008 : 30)。「〈縁起〉の間」はこうしたワークショップにより開花される可能性を持つ。ただ、「フィールドワークショップ」は経験の契機に過ぎず、その後の展開を包括するものでない。深見聡はワークショップの「気づき」から地域のコミュニティ再生を目指す手法として、生活する地域全体を博物館と見なす「エコミュージアム」を挙げる(深見 2007 : 55)。「エコミュージアム」は「フィールドワークショップ」の始まりから展開を包括する構想で、未来に向かい「文化資源」に愛着を持ち育む担い手、キーパーソンの登場の契機を包含し、コミュニティ再生ひいては地域再生を可能にし得る。「〈縁起〉の間」の生起をより具体的に考えるならば、「エコミュージアム」の設置と運営主体を考える必要がある。ただ、これを全て自治体に委ねるならば、自治体主導の「〈縁起〉の間」「づくり」となり、コミュニティ政策の二の枚となろう。新井重三が「エコミュージアム」設置は行政・住民一体で取り組む必要があり、設置には両者の合意が必須とするよう、両者間での熟議が求められる(新井 1995 : 18)。

これからの地域再生に求められるのは、つながりの再生が導く、かけがえのなさの再生である。網野は現代の「無縁」の人々によって、「無縁」「無所有」の思想は必ず創造されるという言葉を残した(網野 1996 : 250-1)。この思想は現代の「小さき地域の民」によって創造されていくと言える。地域再生は現代の「小さき地域の民」の手に委ねられると言って過言でない。「小さき地域の民」を育む「〈縁起〉の間」をいかに地域に生起させるかに地域再生の要があると言えるだろう。

### ■ 註

- (1) (玉野井 1979 : 19) の定義「自然・歴史・風土をふまえたトータルな人間活動の場」の意。
- (2) (広井 2009 : 11) の定義「何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間の一定の



連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」を用いる。本論では「(地域) 共同体」もコミュニティに読み替えて取り扱う。

- (3) 個人と国家を媒介とする集団で個人の生活欲求を充足する機能と全体社会の秩序を維持する機能を持ち、具体的に地域団体、学校、企業などが挙げられる（見田他 1988：606）。本論ではひとつのコミュニティとして捉える。
- (4) （市井 2001：36、69）の「キー・パーソン」と同義と捉える。

## ■ 参考文献

- ヴィクター・ターナー、梶原景昭訳『象徴と社会』、紀伊國屋書店、1981
- ヴィクター・ターナー、富倉光雄訳『儀礼の過程』、新思索社、1996
- オギュスタン・ベルク、『風土の日本—自然と文化の通態』、筑摩書房、1992
- ジャン・リュック・ナンシー、西谷修他訳『無為の共同体』、以文社、2001
- マックス・ウェーバー、尾高邦雄訳『職業としての学問』、岩波文庫、1936、p33
- ロベルト・エスポジト、岡田温司訳『近代政治の脱構築共同体・免疫・生政治』、講談社、2009
- 赤坂憲雄、『異人論序説』、筑摩書房、1992
- 網野善彦、『日本論の視座—列島の社会と国家』、小学館、1993
- 網野善彦、『無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和』、平凡社、1996
- 網野善彦他、『中世の再発見』、平凡社、1994
- 新井重三編『実践エコミュージアム入門：21世紀のまちおこし』、牧野出版、1995
- 市井三郎、『歴史を創るもの』、第三文明社、2001
- 内山節、『共同体の基礎理論—自然と人間の基層から』、農山漁村文化協会、2010
- 延藤安弘、『『遊歩謀讃』としてのフィールドワークショップ』、桑子敏雄編『日本文化の空間学』、東信堂、2008、pp20-50
- 延藤安弘、『『まち育て』を育む—対話と協働のデザイン』、東京大学出版会、2001
- 大杉高司、『非同一性による共同性へ／において』、杉島敬志編『人類学的実践の再構築』、世界思想社、2001、pp271-296
- 岡田温司、『イタリア現代思想への招待』、講談社、2008
- 岡田真美子、『地域づくりと実践的学問』、桑子敏雄編『日本文化の空間学』、東信堂、2008、pp134-149
- 小田亮編『グローカリゼーションと共同性』、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、2010
- 勝俣鎮夫、『戦国時代論』、岩波書店、1996
- 兼松はるみ、『井元邸から文化のみち撞木館へ』、『建築とまちづくり』、359、2007.10、pp2-24
- 神島二郎、『転換期日本の底流』、中央公論社、1990
- 河合隼雄、『河合隼雄著作集 物語と人間』、岩波書店、2003
- 河合隼雄他、『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』、岩波書店、1995
- 河本英夫、『オートポイエーシス』、青土社、1995
- 共生社会形成促進のための政策研究会、『「共に生きる新たな結び合い」の提唱』、内閣府、2005
- 倉田和四生、『コミュニティ活動と自治会の役割』、『社会学部紀要』、86号、関西学院大学、2000.3、pp63-76
- 黒川紀章、『新 共生の思想』、徳間書店、1996
- 黒田龍二、『中世地縁共同体宗教施設の輪郭』、『シリーズ都市・建築・歴史』、3巻、東京大学出版会、2006、pp215-275
- 国民生活審議会調査部会、『「コミュニティ—生活の場における人間性の回復」報告書』、1969
- 小林康夫、『プリコラージュ的自由』、『現代思想』、22巻、5号、1994.4、pp252-257

- 三枝充恵、『縁起の思想』、法藏館、2000
- 神野直彦、『地域再生の経済学』、中央公論新社、2002
- 杉浦直、「空間的シンボリズムと文化」、岩手大学人文社会科学部総合研究委員会、『文化の基礎理論と諸相の研究』、1992、pp55-74
- 玉野井芳郎、『地域主義の思想』、農山漁村文化協会、1979
- 鶴見和子他編『内発的発展論』、東京大学出版会、1989
- 鶴見和子、『内発的発展論の展開』、筑摩書房、1996
- 鳥越皓之、『環境社会学の理論と実践』、有斐閣、1997
- 中村雄二郎、『哲学の現在 — 生きることを考えること』、岩波書店、1977
- 中村雄二郎、『術語集Ⅱ』、岩波書店、1997
- 萩原建次郎、「子ども・若者の居場所」、高橋勝編『子ども・若者の自己形成空間』、東信堂、2011、pp40-77
- 馬場憲一、『地域文化政策の新視点 - 文化遺産保護から伝統文化の継承へ』、雄山閣、1998
- 久田邦明、『生涯学習論 — 大人のための教育入門』、現代書館、2010
- 広井良典、『コミュニティを問いなおす』、筑摩書房、2009
- 深見聡、『地域コミュニティ再生とエコミュージアム』、青山社、2007
- 藤木久志、『村と領主の戦国世界』、東京大学出版会、1997
- 藤木久志、『中世民衆の世界 — 村の生活と掟』、岩波書店、2010
- 眞鍋貞樹他編『コミュニティ幻想を超えて』、一藝社、2011
- 見田宗介他編『社会学事典』、弘文堂、1988
- 森有正、『生きることを考えること』、講談社、1970
- 森雄一、「惣堂・村堂の存在形態：京都府和知町の事例を通じて」、「日本建築学会計画系論文集」、573、社団法人日本建築学会、2003.11、pp141-146
- 山下晋司、「文化という資源」、内堀基光編『資源と人間』、弘文社、2007、p52
- 横道清孝、『日本における最近のコミュニティ政策』、自治体国際化協会他、2009